

「浮世絵の素顔に迫る」

～知られざる浮世絵の世界～

2017年9月15日（金）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

9月15日（金）9:30～11:40、表参道の東京ウイメンズプラザ於いて、JGA 主催による第一支部「浮世絵」研修が実施されました。日本女子大学名誉教授、国際浮世絵学会常任理事としてご活躍されている及川茂先生を講師にお迎えし、総勢49名（JGA正会員45名、非会員2名、運営委員1名、協力者1名）が参加しました。

講義は第1部（9:30～10:30）では、浮世絵の種類とその特徴、時代による変遷と代表的な浮世絵師をご紹介いただきました。日本では“六大浮世絵師（鈴木春信、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽、葛飾北斎、歌川広重）“という言葉が使われ、その6人以外があたかも二流の浮世絵師であるかのように扱われてしまっている状況があるかと思えます。しかし、浮世絵師は当時1,000人以上もいたそうですが、6人以外にどれ程素晴らしい浮世絵師がいたのかを、その作品とともにご紹介頂きました。さらに、日本では代表的な数名以外は知られていないうえに、良い作品がほとんど海外に流出してしまい、研究もあまり進んでいないという厳しい現実も知りました。

第2部（10:40～11:40）では、第1部の内容をさらに掘り下げ、日本と海外の浮世絵の評価のあまりの違いはどこから来るのか、その背景に迫りました。日本では浮世絵は庶民が楽しむものであり、安価で大量に出回り、題材も庶民が好む風物であったため、あまり大切に扱われて来なかったという事。また明治以降に確立された“日本美術”の概念では、狩野派・琳派以外はあまり評価されなかったことも影響している事も知りました。しかしその一方、海外では早くからその価値が認められ、海外に渡った浮世絵は100万枚とも言われているそうです。浮世絵が印象派に大きな影響を及ぼした事は有名ですが、当時のヨーロッパ絵画の主流が古典的で閉塞感があった中で、大胆な構図で庶民の生活を生き生きと表現していた浮世絵は、非常に斬新なものとして受け入れられたそうです。先生の画像データから印象派の絵画とその中に描かれた浮世絵をいくつか見せて頂きましたが、印象派の画家たちが、浮世絵に憧れ、巧みに自分の作品に取り入れている様子は大変興味いものでした。

この後は質疑応答を交えながら、浮世絵が具体的にどのようなプロセスで作られるのか、版元・絵師・彫り師・刷り師がどのように役割分担をしていたのか、大量に摺られた浮世絵は初版から次第に色調や細部が変わる事があるがそれはどういう事なのかなど、大変広範囲に話が及びました。

及川先生のお話からは、浮世絵の真価を伝えたいという情熱が感じられ、参加者も思わず引き込まれると共に、通訳ガイドとして、また日本人として、浮世絵の価値を正しく理解する事の大切さを実感する事ができたようです。ぜひ、今後のガイド業務に生かしていただきたいと思えます。